

宮崎先生と私

望 月 海 淑

宮崎英修先生を身延山短大の学頭として招聘したのは、私が身延山の庶務部長を兼務している時のことであった。里見泰穂学頭が亡くなられて、公認を誰にお願いしたら良いのかという問題が提議されていた。時の総務は望月一靖師で、総務は短大の理事長でもあったから、当然のこと身延山としても後任学頭を決めるということは、緊急のテーマでもあった。

このような次第で頭を痛めた総務は、どうしたものかと私に相談があり、二人で検討をした結果、宮崎先生にお願いしてみようということになった。このことを短大当局に計ってみたところ異存はなかった。そこで何でも自分の手で声をかけようという、進取の気性に富んでいた総務は自身で上京して宮崎先生を口説き落として来た。

宗門にたいし名前が通っている宮崎先生の学頭就任ということで、短大も身延山も歓迎ムード一色と成ったが、私にとつては内心忸怩たるものがあつたのは事実であつた。これは今だからいえることであり、いわば本邦初公開のことではあるが、かつて私が『法華経における信の研究序説』という本を出版した時に、この本によつて学位を請求しろといつて、その手続きをして論文審査に持ち込んでくれた親切な人がおつた。しかしその時の会議の席上において、一冊目の本では駄目だという意見がだされ、学位の授与は見送りになったということがあつたと聞かされていた。後になつて誰からということなく、件の主張をなされたのが宮崎先生だった、ということを目にしていたからであつ

た。

しかし、それはもう古い話だった。教授・庶務部長・短大理事としての私の立場もあることから、私は一切を忘れて歓迎に務めることに思い究めた。その第一歩が身延山の中に宮崎先生のための一室を確保し、机を用意して、机上に酒の燗をつけるための燗ペットと酒を備えるということであった。

それから後のことは大方の人々が知るところであろうから、すべてを省略することにする。そして、このほど『法華経における信行の研究』によって学位を得ることが出来たのだが、思えば宮崎先生が語ったと聞かされた言葉（推測の域をでないものであるが）によって、発憤をしたからということになるのかもしれない。ここにことさらに記すことによって、宮崎先生の学恩にたいして、深甚な謝意を申し上げる次第である。

（仏教学部教授）